

〈発表要旨〉

人間・吉野作造の“語り部”として30年

——『吉野作造通信』の刊行を中心に——

永澤 汪恭

A. 吉野作造と古川について

吉野作造は、1878（明治11年）年1月29日、ここ大崎市古川十日町の糸綿商吉野屋の長男として生まれました。古川は、町民の多くは農民か、農民相手の商人で、数人の地主が町政を支配する人口8000人足らずの商業都市であり、宿場町でもありました。

吉野の父年蔵は、古川の旧家で呉服反物に奉公した後独立して、街道沿に綿問屋をはじめた進取の気性に富んだ商人でした。また年蔵は、政治にも関心を寄せ、古川自由民主党結成に関係し、商売のかたわら町会議員、のちに町長もつとめたほど町の人々の人望を集めた人物でした。

さて吉野作造のことですが、彼は生まれつきひ弱で、おとなしい性格でしたが、とても頭が良く、読書が大好きで作文も上手な文学少年でした。吉野は時々愛読する雑誌に投稿していたようで、掲載文が残っています。

幸せなことに吉野は、よき家族、よき師友に恵まれ、彼らの感化を受けて、豊かな知性と鋭い感受性を身につけ、町の模範生と称えられ1892年古川高等小学校を主席で卒業しました。その後仙台に開校された宮城県尋常中学校に進学した吉野に町民有志から『言海』が贈られました。その『言海』の若者大槻文彦が初代の校長だった中学校でも吉野は良き師友に恵まれ充実した中学生生活を終え、ここも主席で卒業し、第二高等学校を経て東京帝国大学法科大学に入学したのは、1900年9月のことでした。大学入学時にも町民有志は一大慶事として贈物と祝金を贈り、主席で卒業した折もその優秀な学業をたたえ記念品を贈っていました。このように吉野の存在は、町の榮譽と受け止められていました。

その吉野は、さらに政治史研究のため大学院に進みましたが、家族5人の経済生活は大変苦しいものでした。1906年2月、袁世凱の長男克定の家庭教師の職を恩師に世話してもらい天津に出発しましたが、期待した通りの収入もなく、あれこれアルバイトで暮らしているところへ1908年4月古川で大火があり、吉野屋類焼、経営する羽二重工場も焼失したとの知らせが届きました。実家の破産のショックに帰郷しますが、また天津に戻り1909年1月に帰国した吉野にやっと念願の東京帝大の教師の仕事が与えられました。2月に法科大学助教授（政治史担当）に任命され、翌1910年1月政治史及び政治学研究のため満3ヶ年、ドイツ、イギリス、アメリカへの留学命令が文部省より発令され4月13日横浜港を出発しました。

1923（大正2）年7月帰国した吉野助教授は政治史講座担当を命じられ、翌年7月教授に昇任しました。1915年、学生への政治史の講義で民本主義を述べるだけでなく、同志と

立ち上げた大学普及会機関誌『国民講壇』に寄稿した一文「欧米に於ける憲政の発達及び現状」でも民本主義に言及しています。民本主義については翌 1916（大正 5）年 1 月に発行された雑誌『中央公論』に掲載された大変長い論説「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」の中で詳しく述べられています。

吉野は、民本主義の内容を 2 つの原理から説いたのです。第一は、政治の目的が一般民衆の利福に在る、と言い、第二は、政策の決定が、一般民衆の意向に拠る、と言いました。

この主張は、天皇主権の問題をカッコに入れて、大日本帝国憲法のもとで、民衆の政策決定への参加を理論的に根拠づけようとしたものでした。当時この論文は、右は天皇主権者から、左は社会主義者から厳しく批判されましたが、彼の主張は言論界に大きな波紋を生んで、大正デモクラシー運動の高揚に寄与したと言えます。

その後の吉野の言論活動の内容は、民本主義による政治社会実現の弊害となっている官僚や軍部さらには枢密院に対する批判に及びました。その結果吉野が官僚から危険視され右翼から嫌がらせを受けるようになると、かつて吉野を郷里の誇りとして応援してくれた郷里の人々からも敬遠されてしまったのです。満州事変勃発の 2 年後吉野は病死しました。

日本は敗戦という大きな犠牲を払って日本国憲法を制定し、民主的で平和な国家としてスタートを切りました（1947 年）。その 3 年後東京において吉野の教え子が中心になって「吉野博士記念会」が結成されました。

ようやく吉野の郷里古川でも吉野に関連する催しが始まりました。最初は、古川高等学校文芸部が文化祭で行なった「吉野作造博士関連図書展」でした（1957 年）。その 2 年後の 1959 年 12 月 15 日に「吉野作造先生誕生 80 年記念講演会」が開催されました。市民有志による実行委員会が古川市の後援を得て周到な準備のもと開催した講演会で、田中惣五郎明大教授、池田哲郎福大教授の二氏を講師に迎え、聴衆は講演を通し、吉野の人間性の素晴らしさと偉大な業績を知る、実に有意義な講演会となりました。

この講演会の成功により、1962 年 10 月、吉野を敬愛する市民有志によって「吉野先生を記念する会」が結成されました（初代会長は三浦篤古川市長）。

会が取り組んだ最初の事業は、吉野の顕彰碑の建立でした。会では「吉野先生記念碑建設趣意書」（生徒向けの印刷物も作成）を基に積極的な募金活動を古川市内外に展開。前述の東京の「吉野博士記念会」からも絶大な協力が寄せられ、1966 年市民会館の一角に記念碑「古川学人 吉野作造之碑」が建立されました。実に立派な記念碑です。

記念する会のその後の事業内容としては、「吉野文庫」の設置（1969 年）、『目で見ると吉野作造』の小冊子発刊（1974 年）、吉野作造博士資料展示コーナー設置（1978 年）、吉野博士誕生 100 年記念事業（1978 年）として記念メダルを発行し、記念講演会（新明正道「吉野作造先生と大正デモクラシー」）が行われました。

吉野没後 50 回忌記念事業（1983）として、絵入官葉 2000 部製作発売、と記念講演会「吉野先生の民本主義」（祇園寺信彦）、1986 年 11 月には、民本主義提唱 70 周年記念事業として記念講演会（三谷太一郎「民本主義の歴史的意味」）と高校生による弁論大会でした。

1990年、古川市が市制施行40周年の記念事業の目玉として「吉野記念文化ホール」（仮称）を建設すると表明。市民の間に吉野への関心が高まり、多くの講演会や勉強会が開催され1995年1月吉野作造記念館が開館したのです。その背景には市民有志の長年にわたる吉野を敬愛する熱い思いと顕彰運動がありました。

B. 『吉野作造通信』について

私たち（宮城県歴史教育者協議会有志）は、1986年1月『吉野作造通信』を創刊しました。吉野が雑誌『中央公論』紙上で民本主義論を発表して70周年のことでした。

当時私たちは、吉野の人と思想を高く評価していました。まず第一に吉野の民本主義理想が、現在の『日本国憲法』の基本理念の源流をなす点。第二に吉野はキリスト教ヒューマニズムに立脚しながら、中国や朝鮮の留学生を援助し、中国の五・四運動に深い理解を示し、さらに朝鮮の民族自決を究極的に支持した点です。これら吉野の先駆性に加え、吉野と宮城県のかかわりの深さです。吉野は講演のため何度も来県し、宮城の人たちとの交流を通じ影響を与えている点に特目しています。吉野は、東京在住でも、予想以上に来県していたことを確認出来たことは大きな収穫でした。吉野と交流のあった方から伺った貴重な内容は、是非とも多くの方にお伝えする責任があるとの思いから『通信』の発行を決意しました。

その発行は、個人の費用負担としないで、発行基金を募って息長く行なうこととしました。つまり『通信』発行の営みを吉野の研究顕彰運動と性格付けをして、『通信』の発行を通して地域の人々に支えていただく『通信』にしようと考えました。

その内容は、地域ゆかりの資料や証言内容の紹介に加え、一流の研究者による吉野作造論も掲載し、研究者にも注目される質の高いものにしたいと願ってスタートしました。創刊から30年近くなり、16号まで発行してこれたのも、カンパニアの皆様の『通信』発行の意義へのご理解とご協力の賜物です。

また私たちは、吉野の人と思想を広く伝えるために『通信』発行に加え、吉野の命日近くに「吉野作造を偲ぶ朗談会と講演会」を2009年より行っています。時に吉野が大切にしていた日韓交流の精神を現代に継承するため、仙台在住の韓国の方を吉野の集会にご案内し、プログラムへのゲスト出演をしていただきました。2010年10月10日に開催された「韓国併合100年吉野作造の朝鮮観に学ぶ集い」では、東北大学で学ぶ留学生の嚴泰奉氏に「アリラン」と「鳳仙花」を歌っていただきました。戦後70年の「偲ぶ朗談会」では、仙台韓国教育院長の河泰成氏に尹東柱の詩を朗読していただきました。仙台在住の方の手に、韓国の書画家、丁大有が吉野作造のために筆をとった書が二点あります。これは日韓交流の歴史を考える貴重な証しになるだろうと思い、これが丁から吉野に贈られた由来を調べています。皆様にも関心を持っていただき、ご協力いただければ幸いです。

ご静聴有り難うございました。